

東奥日報

2018年(平成30年)9月15日月曜日(20)



浪岡らしさが生きる包装紙作りを目指して開かれたワークショップ

包装紙で魅力発信

浪岡 デザイン事業スタート

青森

青森市教育委員会は8日、市浪岡交流センター「あびねす」で浪岡地区の特色を生かしたオリジナルの「当地包装紙」作りに向

けたワークショップを開いた。地元住民や学生、行政の関係者20人が集い、「中世の里」「浪岡城」だけでなく、地区に眠る資源をどう活用してデザインするか、議論を交わした。

地元の自然、景観や観光資源を新たに掘り起こして浪岡の魅力の詰まった包装紙を製作。地域の力を住民に再認識してもらうとともに、域外から来た人にも浪岡の売り込みを目指す。

ワークショップでは八戸工業大学感性デザイン学部2年の稲葉航生さんと香澤希実香さんが「和菓子屋が多い」「住宅や家の外装が多彩な色を使っている」「食べ物やボリュウムが多い」など、街を散策して気になったポイントをユニークな視点を交えて紹介し「ロマンあふれる街と感じた」などと総括した。

作業の手順などを説明した同大感性デザイン学部の横溝賢准教授は取材に「ここに暮らす人々が、楽しんで誇れるデザインの包装紙となれば良い」と話した。

参加した浪岡商工会の阿部哲事務局長は「以前にも包装紙作りに取り組んだがうまくいかなかった。今回の試みが浪岡活性化の糸口となってほしい」と期待感を込めて作業を進めた。

今回の事業は「浪岡城跡を中心とした学官民連携デザインワークショップ」で事業費は約50万円。次回合
合を経て包装紙のデザイン候補案を、10月14日に浪岡城跡で開かれる「スポー
ツ鬼ごっこ合戦」浪岡の「陣」参加者による投票やアンケート結果を踏まえて絞り込む。完成は3月の予定。
(本間善幸)

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」